

197

食道癌の肝シンチグラム

越谷市立病院放射線科

○宇野公一，村上優子，益永陽子
谷口克己，安河内浩

我々は食道癌の肝シンチグラムにおける報告が少なくと思われるので症例を報告する。

肝転移の有無は、切除可能か否かを決定するのに極めて重要な事で、その診断をするのに肝シンチグラムは極めて有効である。又非切除例においても経過観察に役立つので供覧する。

(症例1) 55才男、扁平上皮癌、Ei7cmラセン形肝シンチグラム転移(-)。術前照射4000rad、効果(+)。術后死亡。

(症例2) 52才男、扁平上皮癌、Ea10cm鋸歯形肝シンチグラム転移(-)。術前照射3000rad、効果(+)。術后照射3000rad、現在14ヶ月、肝シンチグラム転移(-)。

(症例3) 66才男、扁平上皮癌、Im11cmラセン形肝シンチグラム転移(±)。8250rad照射、効果(++)。2ヶ月后肝シンチグラム転移(+)。5ヶ月后死亡。

(症例4) 75才男、扁平上皮癌、Ei9cm鋸歯形肝シンチグラム転移(±)。5000rad照射効果(++), MMC動注により転移縮小。8ヶ月後悪液質のため死亡。

(症例5) 75才女、扁平上皮癌、Ei11cm鋸歯形肝シンチグラム欠損(+)、6000rad照射効果(++), 欠損像は血管造影で血管腫と診断、12ヶ月后肝シンチグラム不変。

(症例6) 62才男、扁平上皮癌、Ea5cm腫瘍形肝シンチグラム転移(±)。開腹時転移(+)。6000rad照射効果(++), 1ヶ月后肝シンチグラム転移(+), MMC動注しながら10ヶ月生存中。

(症例7) 75才男、扁平上皮癌、Im3cm腫瘍形肝シンチグラム転移(-)。鎖骨上窩転移(+)。5000rad照射、効果(+)。3ヶ月后心不全で死亡。

(症例8) 73才男、扁平上皮癌、Ei10cmラセン形肝シンチグラム転移(-)。6000rad照射効果(++), 7ヶ月生存して現在肝シンチグラム転移(-)。

(症例9) 66才男、扁平上皮癌、Ei2cm表在隆起形肝シンチグラム転移(-)。6000rad照射、効果(++), 2ヶ月後現在肝シンチグラム転移(-)。

以上9例につき症例を報告する。

198

悪性リンパ腫および白血病の肝シンチグラムと動態解析

埼玉県立がんセンター 放射線部

○中島哲夫 角 文明 砂倉瑞良

同上 診療部

田部井敏夫

聖マリアンナ医科大学 第3内科

佐々木康人

群馬大学 放射線科

永井輝夫

我々は日常の肝シンチグラムに際してLFOVガンマカメラとミニコンピューター(シンチパック200)を使用し、肝の大きさ、肝集積指数(K値)、脾/肝カウント比(S/L比)などを定量的に求め、RIアンジオグラフィ、スタティックイメージとともに総合的核医学診断を行っているが、今回は悪性リンパ腫白血病的び慢性肝浸潤の診断における本法の有用性を検討した。

[方法と対象] 検査の方法は既に報告した通りであるが、K値の測定にはコンピューター処理を導入し、次のように変更した。99mTcフチン酸4mCi静注後ミニコンピューターに集録した10秒間隔90フレームのデータから肝集積曲線を得、それを $A=A_0\{1-EXP(-Kt)\}$ (A_0 は最終フレームのカウント)と仮定して、最小自乗法で逐次近似法によりcurvefittingを行って求めた。対象は本法で肝シンチグラム検査を行った420症例中、悪性リンパ腫29例(ホジキン氏病6例、細網肉腫23例)および白血病5例である。

[結果] 悪性リンパ腫、白血病で慢性肝浸潤が明らかな症例ではK値が、悪性リンパ腫では平均0.407、白血病では平均0.422と正常対照の 0.258 ± 0.044 に比し、明らかな高値を示した。経過を追跡した症例では、化学療法により軽快した場合は肝の縮小とともにK値は低下し、再発悪化した場合には肝の増大とともにK値は上昇した。肝シンチグラム上では、悪性リンパ腫症例で軽度肝腫大を呈する場合は左葉の腫大が目立つ例が多く脾も大きくなる傾向が見られた。

悪性リンパ腫症例において肝、脾への浸潤の有無の診断は病期の決定、治療法の選択に極めて重要なポイントである。肝シンチグラムで著明な肝脾の腫大や局所欠損を呈すれば、その診断は容易であるが、軽度の腫大を示す例や、不均一分布を示す例ではその断定は困難である。かかる場合にK値の測定が診断に有用な手がかりを与える可能性があると考えられる。さらに肝の大きさ、不均一分布の程度、K値、脾の大きさを指標にスコアリングを行い本検査の診断能について検討している。